

人事院公務員研修所

アクセス

サイトマップ

行政研修について

研修の予定

研修参加の皆様へ

講話

推薦図書

リンク集

第134回行政フォーラム「エボラ、デング熱を考える」要旨

講師：山本太郎 長崎大学熱帯医学研究所教授



本年8月、埼玉県で海外渡航歴のないデング熱患者が確認され、70年ぶりの国内感染が発生した。前回の国内感染は昭和17年であるが、南方からの帰還兵がデングを持ち込む一方で、空襲に備えた防火水槽がボウフラの繁殖地になったため、西日本を中心に感染者20万人の大流行が発生したのである。今年の感染状況を見ると、少なくとも数回の感染が回っていた可能性が高く、最終的に160人以上の感染が確認されている。これだけの感染が今年にまた起こったとは考えにくいというのが専門家の意見であり、今までも国内感染があったのではないかと推測される。

デング熱の潜伏期間は3日～7日で、発熱は二峰性のため一度熱が下がってもまた熱が上がる。疼痛、眼窩痛、筋肉痛などのインフルエンザのような症状があり、発疹を伴うのが特徴的である。重症型のデング出血熱では、発熱が終わり平熱に戻りかけたところで出血傾向が見られる。これは血管の透過性の亢進が起こるため、治療法は輸液であり、アスピリンのような出血傾向のある解熱剤の使用は禁忌である。世界全体では、毎年1億人くらいがデング熱に感染して、25万人くらいが出血熱を発症する。黄熱が流行している地域ではデング熱が少なく、デング熱が流行している地域では黄熱は少ないが、これは媒介している蚊をウイルスが競合する形で取り合うからだといわれている。

日本では、これまでも毎年100～200人の輸入症例が報告されていたにもかかわらず今回注目されたのは、温暖化によってデング熱を媒介するヒトスジシマカの生息域が毎年北上していて、国内で恒常的にデングが発生する状況になることが懸念されるからである。デング熱を極端に恐れる必要はないが、今後は海外渡航歴がなくともデングウイルスの検査を行うことが重要になる。

今回のエボラ流行の感染源は、ギニアのゲゲドゥという町に住む2歳の男の子だと考えられている。本人、母親、姉、祖母が亡くなっているが、この時点では誰もエボラだとは思わなかった。その後、2014年の2～3月にかけて数十人が死亡し、エボラの流行が確認されたが、この時点では、流行はすぐ収束するだろうと思われていた。ところが、6月にはリベリア、シエラレオネに飛び火し、8月にはWHOが西アフリカにおけるエボラ拡大を「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」と宣言するようになった。

流行拡大の原因としては、発生地がギニア南部のリベリアやシエラレオネとの国境地帯に位置していたこと、リベリアの内戦とシエラレオネの内戦により難民が押し寄せたためゲゲドゥの人口が急増し、医療制度がそれを支えきれなかったことなどが挙げられる。現在まで流行のペースは変わっていないが、流行の規模の拡大にしたがって感染者数が急増している。感染症のリスクは、「起こる確率×起きた場合のインパクト」で定義され、エボラは起こる確率は高くないが、起きた場合のインパクトが高い。ところが、流行の初期には、確率もインパクトも評価が困難であり、感染症のリスク評価を正確に行うことが難しいという問題がある。

エボラ出血熱は、潜伏期間が通常は7～10日程度で、潜伏期間中には感染力はないといわれている。症状は、発熱、悪寒、筋肉痛が起こり、進行すると全身に出血がみら

研修

- ▶ 合同初任研修
- ▶ 初任行政研修
- ▶ 3年目フォローアップ研修
- ▶ 課長補佐級研修
- ▶ 課長級研修
- ▶ 特別課程
- ▶ 幹部行政官セミナー
- ▶ 行政フォーラム

その他の情報

連絡先・組織

れる。致死率は50～90%と高いが、先進国のICUでケアが行われれば、かなり低くなるのではないかと考えている。エボラが発見されたのは1976年であるが、今回のような大規模な流行は初めてである。エボラの流行に関する一番の問題は、現在が今までのような散発的な流行から「エボラの常住する世界」に変わる瀬戸際にあるかもしれないということである。エボラ流行の拡大を後押ししたのは、遺体に触れて哀悼するというアフリカの習慣に加えて、急激な都市化や内戦で脆弱になった保健制度、それがもたらす医療不信などが挙げられる。

狩猟、採集時代には、感染症は極めて限られた範囲でしか起こらなかったが、農耕の開始による人口の増大と野生動物の家畜化によるヒトと野生動物の接近がこの状況を変えた。麻疹はウシやイヌから、結核や天然痘はウシから、インフルエンザはアヒルやブタからもたらされたものである。そして、エボラはオオコウモリ、エイズはアフリカチンパンジー、SARSはコウモリからもたらされたといわれている。開発や気候変動により、ヒトと野生動物との距離が再び変わってきている可能性がある。それが、今年のエボラ大流行の原因なのかも知れない。したがって、今後の感染症対策としては、現場での対策と同時に、気候変動の問題、ヒトと野生動物との距離の問題、急速な都市化の問題、紛争や内戦がもたらす問題などへの対応が重要になってくると考えられるのである。